

入賞作品紹介

⑥

僕と新聞

会津若松市 佐藤 響さん
若松三一年

初めて新聞に興味を持ったのは、二歳の頃だった。その頃は新聞は一つの遊び道具。破いて音を楽しんだり、折ってかぶとを作ったりかぶって遊んでいた。次は、四コママンガや写真、覚えてたの文字を見つけては喜んでいた。小学生になってからは、毎朝、新聞受けに届く新聞を取る、家でまかされている仕事を今も続けている。

新聞配達員さん
毎朝、新聞配達員さん

生活している中では情報があふれている。そんな情報社会の中で新聞の利点は、三つある。一つ目は、一束で様々な情報を得ることができる。テレビのらん、四コママンガ、スポーツらん、政治らん、たくさんある。一回でたくさんさんのジャンルの情報を得ることができるのはよいことだ。二つ目は、紙でしか味わうことのできないぬくもりだ。インターネットとの違いは、情報を受け取る人とのコミュニケーションがあることだ。三つ目は、新聞の情報は取材した内容などで作られている。そのため、僕は安心して新聞から情報を得ることができると思う。インタ

ネットでも正確な情報はあろうと思う。しかし、ときにはうその情報もある。現在日本は、インターネットが普及し、新聞で

情報を得る人は年々減少している。しかし、こんな時こそ若男女、誰でも楽しむことのできる新聞をみなさんにも読んでほしい。

子供の時から、親が新聞を読む姿を見て育ち、新聞を読むのがあたり前だと思っていたが、働くようになって、そのあたり前の奥にある取材の苦労、製作の苦労、配達の苦労に毎朝感謝である。今や、実体のないデジタル社会の中で、クリック一つで何でもできてしまう世の中である。ニュースはネットで、自分の興味のあるところしか見ない人が増えていくという。むしろ新聞こそ、その窮極のアナログ性に意味がある。本も電子書籍に制圧されるかと思いきや、電子版が伸び悩んでいるらしい。

子供にも、自分がそのように新聞を読み、味わう姿を見せていきたい。車も自動運転化して、現在の仕事は将来あるかどうか分からなくなっていく中で、やはり消えて欲しくない仕事がある。デジタル化、無人化されていく時代の流れにおいて、毎朝新聞が届き、読むことができる幸せを続けていきたい。

新聞と私

父 佐藤 繁さん

今まで十回引越して重ねてきた。それは県内、県外どちらでもあるが、どこへ行って、引越して翌日から新聞が届く。日本の新聞、郵便、学校のシステムは、今のネット社会、グローバルな時代より以前のイ

ンフラである。日本中どこへ行って同じサービスを受けることができる。特に新聞は、一日も欠くことなく記事が書かれ、そして配達される。冬の会津では毎朝の配達員さんの苦労に頭が下が

る。指に付くインクの汚